HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	（書評）藤井 光 訳　アンソニー・ドーア 著 『すべての見えない光』（新潮クレスト・ブックス、2016年8月26日、526pp. 2916円税込）
Author(s)	瀬名波, 栄潤
Citation	北海道アメリカ文学, 33, 38-40
Issue Date	2017-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86195
Type	journal article
File Information	senaha_HAL_33_38-40.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【翻訳書】

藤井 光 訳
アンソニー・ドーア 著
『すべての見えない光』
（新潮クレスト・ブックス、2016年 8 月26日、526pp. 2916円税込）

瀬名波　栄　潤

第三回日本翻訳大賞受賞作品。

スクリブナー社の初版本（2014年 5 月）は、月光に浮かぶフランスの古都サン・マロを空中から撮影した表紙。日本語版は対照的だ。セピア色に沈む少年と少女のうつむいた眼差しは、見ただけで切なくなる。帯にある池澤夏樹のコピー「波乱と詩情を二つながら兼ね備えた名作」と「目の見えない少女と、ナチスドイツの若い兵士。二人の運命が、フランスの海辺の町で交差する。」を読んだ瞬間、この作品を最後まで読めないのではないかと心が痛む。

この長編小説は、1934年から2014年までを178ものエピソードで切断し、ジュール・ヴェルヌの旅物語を下敷きに進む。読み口は幾つも入念に用意されている。まずは、第二次世界大戦を題材にした歴史小説。時代に翻弄され、またそれに抗う人々が次々と登場し消えていく。次が、「炎の海」と呼ばれる呪われた宝石の探求物語。アーサー王の聖杯物語やトールキンの『指輪物語』を思い出す。そして、やはりラブストーリー。妹とともに孤児院で育った少年ヴェルナーは、その才能を見出され、ナチスの諜報活動に携わる。一方、視力を失いつつある少女マリー＝ロールは、パリの自然史博物館で鍵工として働く父親と静かに暮らしていた。だが戦況は悪化、サン・マロへと逃れる。ある日、ヴェルナーはラジオの傍受中、マリー＝ロールの声を聞き、恋に落ちる。アメリカ軍によるサン・マロへの空爆が激しさを増すなか、二人は一瞬だけ出会い、そして別れる。

携帯電話による通話が当たり前だと思っている現代の読者に、ラジオが創り出す世界が戦時の人々には如何に不思議で奇跡をも生むテクノロジーであったかを描こうとした、とドーアは着想を明かす。10年後、『すべて

の見えない光』として出版されるやいなや大反響を呼び、2015年にはピュリツァー賞を受賞、オバマ米国大統領の読書リスト入りを果たした。藤井光は、「人は運命を変えられるのか」というドーアの主題は本作品にも貫かれていると分析する。確かにそう。だが、この普遍的なテーマとは別に、中西部出身の白人男性ドーアがアメリカではなくヨーロッパを舞台に選んだのはなぜか。ポスト911文学が提供するオルタナティヴ・ファクトは何か。また、ヴェルナーの一方的な恋心に一種のフェティシズムを感じるのはなぜか。これらは、今後の研究課題だ。

藤井光は、マリー＝ロールを知るためにパリとサン・マロに赴き、「目が見えないとしたら何が感じられるのかを確かめたことは、今回の翻訳にとっては非常に重要な作業だった」と述懐している。だが、その過程は柴田元幸に添削指導を受けた時以来の難行だったようだ。テア・オブレヒト著『タイガーズ・ワイフ』（新潮社）で、2013年本屋大賞（翻訳小説部門）を受賞した彼が、Unsung Heroを演じるのに苦心したのは、作品の多層性だけが理由ではない。ドーア自身が翻訳版を大事に思い、歴史的背景により忠実に、人名や地名を修正する第 9 版目の訂正リストを送りつけてきたからでもない。（ちなみに、本作品は30以上の言語に訳されている。）答えは、藤井光が自らの文体改造に挑んだからだった。

ドーア作品の翻訳家として知られた岩本正恵は、2014年12月31日に亡くなられた。50歳だった。藤井光は、岩本正恵訳に独特の魅力があったことを知っていた。そして、岩本正恵と読者に敬意を払う。メール取材に対し、「岩本さんの翻訳と原文を照らし合わせて、直訳すべき・意訳すべきポイント、文の切れ目などの感覚を自分なりに研究してから翻訳にかかりました。推敲の最後に、もう一度岩本訳を読み直し、漢字にすべきかひらがなにすべきかという点を含めて確認し直しました。」と返信してきた。結果、「ぼくが最初作った訳文からは、大幅に読点「、」が増え、疑問符と感嘆符が九割がた減りました。ひとまわり静かな訳文になった」と言う。その時に作成した資料を見せてもらった。50ページ以上ある。「中で」は「なかで」に、「ゆがみ」は「歪み」といった具合だ。この日本語特有の使い分けは、静かな訳文とドーア独自のエロティシズム漂う世界を創り出した。

かつて、藤井光は自身の著書『ターミナルから荒れ地へ ―「アメリカ」なき時代のアメリカ文学』（中央公論新社、2016年）で、「翻訳とは『嘔吐』

である」（202頁）と説明した。英語を体内に入れ、「異物」として日本語を排出するからだ。日本語版『すべての見えない光』は、岩本正恵へのオマージュとして反芻され、原作者にも翻訳者にも、異物というにはあまりにも美しすぎる新しい光を放っている。